



LibrariEは「いつでも」「どこでも」読書できる電子図書館サービスです。  
スマートフォン、タブレット、PCなどご自身の端末で自由に利用できます。  
ぜひ、電子図書館をご活用下さい！

QRコード



## 1 電子図書館システムにログインする <https://www.d-library.jp/hinadeji/>

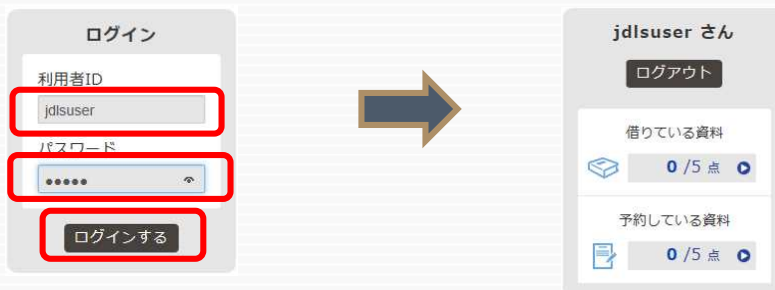


### 【貸出条件】

- ・貸出上限数： 3冊
- ・貸出日数： 14日
- ・予約上限数： 3冊
- ・取置日数： 7日
- ・延長回数： 1回

※画面はイメージです。

ご自分の利用者IDとパスワードを入力して「ログインする」ボタンを押してログインします。



## 2 電子書籍を借りて読む

読みたい電子書籍の「借りる」ボタンを押します。  
貸出完了画面が表示されますので、すぐに読む場合は「今すぐ読む」ボタンを押します。  
ブラウザのウィンドウを閉じれば、終了となります。

読み放題コンテンツを探す場合は、  
ログイン後に「メニュー」→「読み放題」を選択します。  
「読む」ボタンからそのまま読むことができます。



### 貸出結果

「ココミル 箱根 (2017年版)」の貸出が完了しました。2017年10月18日までご利用いただけます。なお、ご利用期限日を過ぎると自動的に返却されます。

今すぐ読む

借りている資料一覧へ

閉じる



### 3 電子資料を返却する・貸出延長する

電子資料は貸出期限が終了すると自動返却されます。  
貸出期限以前に返却する場合は、「マイページ」に移動して「返す」ボタンを押します。

紀伊國屋書店 電子図書館  
LibrariE デモ図書

トップ お知らせ 特集 ▼ **マイページ**

arakawa さん  
ログアウト

借りている資料

フリーワード検索

「延長」ボタンを押すことで貸出延長も可能です。  
※予約の方がいない時一回のみ延長が可能です。

### 4 貸出中の電子資料を予約する

資料が貸出中の場合、予約をすることができます。

世界から猫が消えたなら  
川村 元気 著  
予約する (予約数: 0人)

小さいおうち (文春ウェブ文)  
中島 京子 著  
予約する (予約数: 0人)

超訳ニーチェの言葉  
フリードリヒ・ウ  
予約する (予約数: 0人)

予約している資料が利用できるようになると  
トップ画面にメッセージが表示され、  
取り置き期間中に貸出できます。  
(取り置き期間が0日の場合は自動で  
貸出処理がされます)

jdluser さん  
ログアウト

借りている資料  
0 / 5 点

予約している資料  
1 / 5 点

ご予約中の資料が1点ご利用できました。

予約している資料 1/5点  
あと4点予約することができます。

予約日: 2017年4月26日  
予約順位: 1 人目 / 1 人中

借りる 予約取消

### 5 ビューワ設定 (文字サイズなど) の変更方法

ビューワ中央あたりをクリック (タップ) すると設定変更画面が表示され、設定を変更することができます。

三四郎 夏目 漱石

書籍情報  
目次・しおり・メモ  
本文検索  
自動ページ送り  
リーダー設定

設定内容を反映させるには、チェックボタンを押します。

文字サイズ  
ON

### 6 音声読み上げ機能の利用

音声読み上げが許諾されているコンテンツに限り、機械音声読み上げ機能を利用することができます。

は先へ進んでゆき、ぼくは柵にそって歩いた。ラスターが花の咲いている木のどくたちは柵にそって歩き、彼らが立ちどまるとぼくたちも立ちどまり、ラスターだぼくは柵の隙間から見つめた。

「いくぞ、キャディー」彼は打った。彼らは牧場の向うのほうに過ぎかかっていて、彼らが過ぎかかっていくのを見つめた。

「こら、何をうめいてるだ」ラスターが言った。「三十三にもなってそんなふうおめえまちょっとしたもんでねえかよ。おいらがはるばる町へ出かけていって、と。そんなにうめくのはやめなったら。おいらが今晚ショーを見たいを手つだってくれねえかよ」

ほうにいる彼らは、ほとんど打っていなかった。ぼくは柵にそって、おいらがはるばる町へ出かけていって、と。そんなにうめくのはやめなったら。おいらが今晚ショーを見たいを手つだってくれねえかよ」

ほうにいる彼らは、ほとんど打っていなかった。ぼくは柵にそって、おいらがはるばる町へ出かけていって、と。そんなにうめくのはやめなったら。おいらが今晚ショーを見たいを手つだってくれねえかよ」

は先へ進んでゆき、ぼくは柵にそって歩いた。ラスターが花の咲いている木のどくたちは柵にそって歩き、彼らが立ちどまるとぼくたちも立ちどまり、ラスターだぼくは柵の隙間から見つめた。

「いくぞ、キャディー」彼は打った。彼らは牧場の向うのほうに過ぎかかっていて、彼らが過ぎかかっていくのを見つめた。

「こら、何をうめいてるだ」ラスターが言った。「三十三にもなってそんなふうおめえまちょっとしたもんでねえかよ。おいらがはるばる町へ出かけていって、と。そんなにうめくのはやめなったら。おいらが今晚ショーを見たいを手つだってくれねえかよ」

ほうにいる彼らは、ほとんど打っていなかった。ぼくは柵にそって、おいらがはるばる町へ出かけていって、と。そんなにうめくのはやめなったら。おいらが今晚ショーを見たいを手つだってくれねえかよ」

ほうにいる彼らは、ほとんど打っていなかった。ぼくは柵にそって、おいらがはるばる町へ出かけていって、と。そんなにうめくのはやめなったら。おいらが今晚ショーを見たいを手つだってくれねえかよ」